

論考

保育者の「養護性」はどのように形成されたのか —— 沖縄県在住の元保育者の語りから ——

松本なるみ
岩崎美智子

1 研究の目的

これまで筆者らは、全国の元保育者（主に、保育所保育士）を対象に、ライフヒストリーを聞き取る作業を続けてきた。その過程で感じたのは、沖縄県在住の保育者たちがもつ、いわば「包容力」とでもいうような他者に対するかわり方である。その後、対象を広げて、戦後混乱期から本土復帰前後に子どもたちを養育していた元児童養護施設保育士たちにインタビューを実施したところ、十分な制度や社会的援助のない厳しい条件下で子どもたちの養育に献身した保育士たちの姿が明らかになった。^{注1}

本稿では、児童養護施設に勤務していた保育者た

ちを対象として、保育・養護実践の根幹にあると考えられる「養護性」がいかにして形成されてきたのかを、彼女たちの幼少期からの生活と意識を検討しながら考察する。

2 研究方法

対象者一人当たり2時間程度の半構造化インタビューを実施。時期は、二〇〇九年十一月と二〇一〇年十一月～十二月の2回である。調査対象者は沖縄県在住の元保育者10人（全員女性。児童養護施設保育士9人、児童養護施設と保育所に勤務した保育士1人）で、今回の分析対象は2回聞き取りを行った6人（平均年齢七十歳）に限定した。

3 養護性とは

養護性の概念は、対象をわが子に限定するとならぬ方もあるが、本研究では、わが子以外の者も対象として考える小嶋の「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」、言い換えるならば「相手を慈しみ育む心と技能」という概念を用いる。^{注2} 養護性は、相手が育つことを最終目標にしている点で独自の意義をもち、相手へのプラスの関心・情操と素朴な共感性が基礎となる。つまり養護性の本質は、相手の育ちに関心をもち寄与できることが、そのまま自分の喜びとなるということである。また、養護性は、養育者としての大人だけではなく、幼児期から発達させていくものであると考えられる。養護性の形成過程は、他者に直接世話をしてもらう経験や、人が世話することを観察することが基礎となつて、幼児期から養護的な相互作用を再現し、その経験をを通して自分の内面に養護する役割を形成していくと考えられている。^{注3} そのため、元保育者の幼少期からの生活について聞き取ることは、養護性の形成

過程を知る手だてとなると考えた。

4 聞き取り調査の結果から

まず、対象者の子ども時代について見ていこう。彼女たちのきょうだいの数の平均は5・83人である。平均年齢七十歳である元保育者たちの生まれ年はおよそ一九四〇年前後であるため、厚生白書によつてその年の一世帯当たりの子どもの数を調べてみると、全国平均は4・27人であった。対象者たちのきょうだいの数は、平均と比べて高い数字である。出生順位は長子1人、中間子2人、末子3人であった。家族内で影響を与えた人物がいるのかどうか。まず貧しい生活の中でも勤勉で子どもと遊んでくれた父や、家族の中心であったしつかり者の母が挙げられた。きょうだいの中では、情熱をもつて理想を語る兄が、また親族では多忙な生活の中でも読書によつて広い視野をもつ叔母など、いずれも年齢の離れた年長者がロールモデルとされていた。また、元保育者全員が、学童期から何らかの乳幼児との接触体験をもっていた。長子と中間子は弟妹の世話を、末

子は姪や甥の子守をしており、遊ぶ時には、友達の子幼いきょうだいも一緒に世話をしながらのことも多かった。異年齢の子ども同士のかかわりが、日々の生活や遊びの中に豊かに見られたといえる。

次に、近隣・地域との関係（ネットワーク）について見てみると、その関係性は、隣家の台所の調味料置き場まで熟知しているなど、日常生活におけるかかわりの深さを表していた。他家でおやつや夕食をこちそうになり、そのまま風呂も済ませて自宅に戻るなど、接触性は非常に高いことがうかがえた。しかし、その空間性は限定的で、交通手段が少なかったことも関係すると考えられるが、同部落内、近隣の地域に限られていた。

この地域共同体は、非常に緊密で双方向的な関係性をもっており、冠婚葬祭などは、親族のみならず、近隣地域の人々が総出で食事の準備や来客のもてなしなどを手伝っていたことも語られていた。つまり、地域における援助性は高く、余裕のある家庭は貧しい家庭に食料を補助するなど、助け合って生きていく姿が浮かび上がってきた。農作業においても、サ

トウキビの収穫などは多くの人手を必要としたことから、各農家がお互いに手伝いながら作業を行っていた。これは「結」または「ゆいまーる」という沖縄独特の言葉で表されている。本土の者から見ると、この「ゆいまーる」という言葉は、沖縄の助け合いの精神の象徴のように感じるが、インタビュアーでは、貧しい状況の中で生きていくための知恵であり手段であったと説明された。

そのほか、近隣の人々による養護体験と被養護体験は注目に値する。隣家での養育や、知人の家で実子のようにかわいがられるのは珍しいことではなかったように、特に沖縄の離島では、そのような子育てが頻繁に見られた。また血縁関係のない年長の青年を男性は「ニイニ」、女性を「ネエネ」と親しみを込めて呼び、地域の祭りや行事を通して、年長の若者たちから踊りや地域の芸能、進路や社会生活について学ぶ機会があり、あこがれの対象として影響を受けることもあった。

信仰（宗教）と行事については、祖先供養や農業に関する行事についての語りが印象的であった。シ

「ミー（清明祭）」と呼ばれる行事は、墓に一族が集まり、持ち寄った酒や料理を楽しむピクニックのような感覚で行われる。このように親族が一堂に会する経験から、祖先拝など過去や未来とのつながりを大切にするのが一般的で、いま自分がここにあるのは、祖先のおかげであり、感謝して生きるのだと対象者たちは語っていた。

社会の影響について見ると、自分自身の生き方や保育の仕事への影響の度合いの認識は人によって異なるが、地上戦の中で死を覚悟したこと、敗戦後の捕虜収容所での経験や海外移民へのあこがれ、祖国復帰運動への参加など、沖縄県特有の歴史・社会的影響を受けたと考えられる側面が見られた。

5 考察と今後の課題

沖縄の元保育者たちの養護性形成要因を考察するにあたり、本研究ではマイケル・ルイスの「ソーシャルネットワーク理論」に注目した^{注4}。それは、子どもの対人関係の発達においては、母親との関係だけではなく、複数の人々との関係も重要であり、複数

の他者との関係が同時並行的に形成されているという考え方である。ルイスが作成したソーシャルネットワークマトリックスを援用し、元保育者たちが誰と、どのようにかわる体験をしたのかを、語りから読み取って表を作成した（表1）。

その結果、彼女たちの養護性の形成要因として、以下に示す五つのが明らかになった。

▼表1：沖縄の元保育者たちのソーシャル・ネットワーク

ソーシャル・ネットワークの構成員	社会的機能/対象者 (A B C D E F)																													
	保護						世話						養護性						遊び						学習					
	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F
本人																														
母	●	●	●							●																			●	●
父	●																												●	
姉										●																				
兄			●																										●	●
妹										○																				
弟																														
祖母																														
祖父																														
親戚	●																													
おば																													●	
おじ																													●	
いとこ																														
姪																														
甥																														
隣家の人々				●																									●	●
地域の人々				●																									●	●
教師																													●	●
友達																													●	●
友達のような人																													●	●

●他者からの行為 ○本人の行為

ルイスのソーシャルネットワークマトリックスを参考に筆者らが作成

第一に、彼女たちは、家族だけではなく地域や家族以外の他者とのかわりの頻度が高く、子育ての担い手も、家族のみに限定されず、隣家や地域も含まれているということである。

第二に、自身の家族成員と他者との境界のあいまいさである。インタビューでは、「夫（婚約者）が職場に来て子どもたちと遊ぶ」「自宅に退所児が家族を連れて遊びに来る」「自分の子どもと入所児と一緒に遊ばせる」「金銭的援助をする」など、自身自身の家族と担当児童とが区別なく継続的なかかわりをもっていることが頻繁に語られた。

第三に、家族関係の特徴として、いずれの対象者の母親も仕事や家事といった生活に追われて多忙であった。そのためか、自分を最もかわいがってくれた人として、父や兄など男性の家族を挙げる者や地域の人を挙げる者も見られた。ここから、養護性の形成過程においては、必ずしも母子関係のみが重要であるとはいえないことが示唆された。

第四として、乳幼児との接触体験の豊かさである。全員が子守を経験しており、幼児期から乳児を背負

い遊ぶこともそれほど珍しいことではなかった。年下の子どもを世話するという経験は、養護性の技能的側面を育んだと考えられる。

第五として、対象者たちは幼児期からシーミーなどの行事に親族や地域の人々と参加して先祖へ感謝をしつつ、自然への畏怖の念を身につけていったということである。これらの経験は、共同体的な相互扶助観とともに、死生観や他者とのつながりを内面化する契機となったといえるだろう。

今後は、以上の要因が地域性や時代的背景によるものなのかどうかの検証や、地域・世代・職種間の比較研究を行なう予定である。

松本（文京学院大学）／岩崎（東京家政大学）

注

- 1 岩崎美智子・松本なるみ「戦後沖繩における養護児童の生活と保母たちの養護実践―資料と語りからの考察―」東京家政大学人間文化研究所紀要第5集 二〇一一年
- 2 小嶋秀夫「心の育ちと文化」有斐閣 二〇〇一年
- 3 小嶋 同注²
- 4 Lewis, M. "The Child and Its Family: The Social Network Model" Human Development 2005;48:3-27

本研究は、科学研究費補助金の助成を受けて行われた。（基盤研究（C）「戦後日本における保育者のライフヒストリーに関する研究」課題番号二〇五三〇七四八 研究代表者：岩崎美智子）